



復刊第114号
題字 吉岡弥生

三年間を顧みて



副会長
小俣喜久子

今年新聞紙上では約百年來の暖冬異変と騒がれておりましたが、二月末頃より思いがけない降雪に出会い、三月に入っても頬を撫でる風は冷く、冬のような寒さを感じますが、さすがに太陽の日射しは暖く春を告げているようでございます。

この季節の急変で先生方の診療室は時ならぬ急患の対応にさぞかしお忙しいことと存じ上げます。

昨年五月、大阪で開催されました日本女医学会総会は関西の先生方の一致団結の総力のもとに、誠に盛大な会でございます。またその前日の観光も、地元の先生方のご尽力により平日頃は拝観も許可されない名刹の数々をゆつくりご案内いただきま

して、諸先生方のご配慮を改めて深謝申し上げます。

「光陰矢の如し」の諺通り一年は瞬く間に過ぎ去り、今年はやや二年目の改選期の総会を迎えました。

改めて申すまでもなく、会員の諸先生には年四回発行する日本女医学会誌により、この三年間の執行部の動静はすでにご諒承下さっていることと存じますが、とくに学術部担当の研修会に、新たにワークショップを行なうことになりました。

先生方に大変ご好評をいただいております。今後とも先生方のご希望に沿ってテーマを選択して実施してまいります。また第二回「女医の実態調査」も事業部のご努

力により三年間に亘る調査の結果が製本され先生方のお手元に届いているところであります。会計・庶務部では、合同の人事委員会を設け、事務職員の退職金共済加入について検討を重ねていきましたが、新給与表などとともに一応規約ができ上がりましたことは社団法人日本女医学会運営に一層安定感が加わったように思われます。

なお、本年二月七日第八回日本女医学会学術研究助成選考委員会が開催されました。研究助成申請の方々の研究業績は誠に甲乙つけがたいものでありましたが、その中より斬新的な研究内容について助成することになりました。今後とも会員の先生方にはますます研鑽を積まれて研究助成の申請を提出下さいますよう、お勧めいたします。

また二月二十七日、吉岡弥生賞の審査委員会が開催されましたが、学術部門と社会に貢献した部門の両部門について今回は各一名宛のご推薦があり、いずれも最適人物として満場一致で承認されました。詳細は総会の席で会長より発表いたします。

この三年間、新会長のもと、役員一同日本女医学会発展のための、前向きな意見や、質疑応答が活発にくり返されましたが、今後の日本女医学会のため、まだまだやらねばならぬことが山積しているようにも思われます。長いようで短かった三年間をふり返るとき、今はただ爽やかな思いのみ残ります。会員諸先生のご

もくじ

| | |
|------------------------|------------|
| 三年間を顧みて | 小俣喜久子 (1) |
| 各部報告 | |
| 学術部 | 橋本 葉子 (2) |
| 広報部 | 井上 柳子 (3) |
| 事業部 | 石原 幸子 (3) |
| 庶務部 | 野沢 良美 (3) |
| 会計部 | 丸山 芙美 (4) |
| 渉外部 | 平瀬 文子 (4) |
| MWIA ニュース (一九八八年二月) | 藤井 儂子 (5) |
| 支部だより | |
| 第三回定時総会・研修会・懇親会報告 | |
| (東京都支部連合会) | 斎藤 歌子 (6) |
| 平敷先生をかこんで (群馬支部) | 丸茂 晶子 (7) |
| 総会を開催 (栃木支部) | 堀口 文 (8) |
| 講演会に出席して (目黒支部) | 松井ひろみ (8) |
| 学術研究助成者の研究経過報告 | |
| 末梢性痛覚過敏に関する神経生理学的研究 | 水村 和枝 (9) |
| 腎内レニン・アンジオテンシン系に関する | |
| 免疫組織化学的研究 | 成瀬 清子 (9) |
| 尿素サイクル異常症の免疫生化学 | |
| 分子遺伝学的検討 | 児玉 浩子 (10) |
| 東京都支部連合会お知らせ | |
| 国際女医学会第三回西太平洋地域会議(案内2) | |
| 第三十三回定時総会のお知らせ | |
| 理事会議事録 | |
| 常任理事会議事録 | |
| 会員動静 | |
| 編集後記 | |

● 学術部

各

部

報

告

協力・ご支援を改めてお礼申し上げます。

最後に、五月二十二日総会の前日は東京都支部連合会より夜の観劇として歌舞伎座へご案内下さる由でございます。

橋本 葉子

日本女医学会の理事として二期目が終わろうとしております。理事になって学術部を担当して早や六年になりました。第一期目は女医学会の組織に順応するのに無我夢中でしたが、二期目はある程度距離をおいて理事に臨むことができるようになりまして。

学術部の仕事も学術講演研究会が主な仕事であることも分かり、できるだけ皆様のお役に立つようなテーマを選び、最先端の講師に講演をお願い致すよう心がけたつもりです。しかし、人間の性格や興味の対象は十人十色ですので、よかれと思ったテーマもその評価はまちまちであり、それは仕方がないことだと思っております。個人的評価を他人にも強制するようなところが女医学会会員のなか

には往々にして見受けられるのは少し残念に思います。

昨年から学術講演研究会の他に女医学会員によるワークショップも始めました。テーマは会員のアンケート調査を基に、第一回は「老化と疾患」というテーマで行ないました。が、身近な問題なので討論も活発に行なわれました。二回目は「自己免疫」というテーマで行なう予定しております。次回もたくさん参加を得て活発な質疑応答がありますように念じております。このように会員によるワークショップも可能になったことは、研究助成金の援助効果が出てきたものと学術部の理事として嬉しく思っております。ワークショップは中堅の方々を軸に講師をお願いすることを基本方針としております

ので、現在はどうしても卒業生の多い大学の出身者が候補となることは否めません。しかし、今後ワークショップを行なう時、日本全国の医学部出身者の中からそのテーマに就いて講師をお願いすることができるようになった時、学術部の努力が報われたという実感が抱けるのではないかと思っております。

学術講演研究会は秋に、ワークショップは七月頃行なうのが慣例になっておりますので、会員皆様のご意見を事務局までお寄せいただきたくお願いいたします。つねに皆様のご意見ご希望を学術部のテーマ選択に反映させて行きたいと考えております。

今年役員改選の年ですので、今後のことは分かりません。この六年間何も分からなかった未熟者に対し、ご指導、ご鞭撻を賜わり、何とか重責を果たせましたことに感謝いたします。

● 広報部

井上 柳子

昭和六十年五月に、山崎会長の新執行部が発足、会員と本部のコミュニケーションを良くし、魅力ある女医学会として、会員を増やしようとの運動から、早や二年を過ぎようとしております。

振り返ってみますと、広報部も百三号から始まり、百十四号の企画を迎えております。機関紙である、日本女医学会誌を、年に四回発行してあり、会誌に目を通すことによつて、年度の本会の活動状況が、わかっていただけましたので、女医学会の顔としての役割を果たしております。

内容は、巻頭言を初めとし、理事会議事録、常任理事会議事録まで、その間特集として、学術講演研究会、定時総会、吉岡弥生賞と荻野吟子賞の受賞者の挨拶、研究助成授与者の抄録と挨拶、ソレント国際女医学会、第一回ワークショップ等、そして支部便り、会員消息、忙中閑等編集しました。

四月発行の百十号から、紙質も、アート紙に変更し、活字、写真が鮮明になり、明るい紙面になったと思好評を得、お気づきになられたと思います。前号の第二面にのせました、一葉の古い写真のお顔が、は

ざいます。また総会当日にはご多忙のことと存じますが、抹茶のご用意などさせていただきますと連合会会長今野先生からのご伝言でございます。何卒、全国の会員諸先生には

ぜひ先生方の大切な選挙のための総会にご出席下さいますよう、再度お願い申し上げます。会員諸先生のご健勝を祈念いたします。

つきりして、懐しい恩師の若き日の姿に接し、感動をおぼえられたことと存じます。これからの会誌の内容も、栄養面

● 事業部

石原 幸子

事業部は、佐藤副会長、白橋、石津、川口、野中、石原の計六人で三年間一緒に仕事をまいりました。この間公衆衛生事業の一環としての講演会、荻野吟子賞、女医の実態調査とたいへん意義のある仕事がありましたことは、皆様のご協力のお蔭であると、部員一同感謝しております。

講演会は栃木支部、名古屋支部において、「生活の中の中毒学」と題し二回行ないました。これは公衆衛生事業としての講演会ということで、でき得るならば、医師のみでなく、一般の方々の参加も希望いたしました。が、栃木では、パラメディカル、お役所、婦人会と多方面にお声をかけていただき、たいへんな盛況であ

からいえば、あまり辛口ばかりでは、高血圧になりやすいので、ほど良い甘口に、企画の味付けを考えれば、学術面にも、社会面にも、勉強になり、また随筆、詩歌、趣味等で、紙面を通じての、豊かな触れ合いが感じあえて、愛される会誌になるのではないのでしょうか。

終わりに、「ご多忙の中を快く、ご寄稿いただきました先生方に、広報部一同、心から、厚くお礼申し上げます。

りました。名古屋では大勢の女医さんがお集まり下さいました。群馬の岸先生、名古屋の森川先生ならびに、各支部の先生方に、更めてお礼申し上げます。講師はこれもまた事業部の石津先生をお願いしたため、たいへん円滑に行なえたと思っております。この折各支部の活動を直に拝見し、その結果と、女医さんたちの底力と申しますか、心意気に敬服いたしました。今後ますますのご活躍をお祈り致します。なお、九州および四国地区でも予定いたしましたお話しが、実現できなかった。お骨折下さいました福岡の熊手先生、加藤先生、四国の小出理事にお詫び申し上げます。次に荻野吟子賞は設定以来、大村

社団法人 日本女医学会

第三十三回定時総会のお知らせ

日時 昭和六十三年五月二十二日(日)午後一時

場所 京王プラザホテル

①一六〇 東京都新宿区西新宿二二二一
②〇三三四四一〇一一(代表)

なお、五月二十二日午前十時より評議員会が同ホテルで行なわれます。

評議員ご欠席の場合は予備評議員(本部に届出のある方)がご出席下さい。

京王プラザホテルに宿泊ご希望の方は、お早めにお申し出のこと。その際、会員であることをお申し添えて下さい。

庶務部

第二回ワークショップ開催のお知らせ

とき 昭和六十三年七月十六日(出) 午後二時三十分～六時まで

ところ 東京女子医科大学臨床講堂1
テーマ 自己免疫疾患

詳細は後日おしらせします

学術部

今日、ふり返ってみますと、事業部として、外に出かけて行くことは始めての試みであり、いろいろ不安もございましたが、終わってみますと、いずれもよい感触を得た思いがいたしました。

事業部としてまだやるべき仕事もたくさんあると思いますが、この試みが、よりきめ細やかな組織作りと、若い会員の参加をよびかける一つの機会になるならば、これからも積極的な活動を続けて行きたいと部員一同話し合っております。会員の皆様のご協力とご鞭撻をお願い申し上げます。

啓蟄を過ぎたとは申しましたが、まだまだお寒く、暖かい春のおとずれが待たれる毎日でございます。思い返してみますと、副会長久保田先生のご指導のもと、私も六人(明石、三好、鶴川、二村、南雲先生方と野派)で庶務部をお引き受けして、早くも三年間が過ぎようとしております。あつという間のたいへん短い三年間であつたようにも思われますが、また反面、大変長くも感

野沢 良美

じられます。南雲先生の体調をくずされてのご療養、また私の思いがけぬ突然の入院等で皆様方に大変ご迷惑をおかけいたしました。諸先生方の温かいお心づかいが何よりの心の支えでございます。お蔭様で思いのほか早い治癒を迎えることができましたこと、何よりうれしく感謝の気持ちでいっぱいでございます。ほんとうにありがとうございました。さて、ご存知のように庶務部にと

つてもっとも大切なことは、本部と委員のひとりひとりの先生方とのコミュニケーションをとることであると感じております。そのためには皆様方の目となり耳となつて、より迅速な意思の伝達、相互の理解が必要と思われまふ。どんな些細な事でも庶務部一同、和をもつて思う存分の発言、意見の交換をはかつてまいりました。なかでも、①会員数増加のため、日本女医学会のパンフレットを作成し、地方における総会時(前回の大阪など)などには多数の入会を得られ、大変うれしく思っております。また②事務局職員との給与および「中退金」加入による退職時における配慮など会計の先生方とも人事委員会をつくり、いろいろ検討を重ねてまいりました。さらに③定款改正、施行細則見直しなどの必要の声もありとのことで、一人でも多くの先生方からご意見をうかがう等してよりよいものにしてまいりたいものと思っております。まだまだ思うような結果は得られないものの、より一層の女医学会の発展のためにと微力ながら誠実に、和やかに会務を遂行してまいりたいものと願っております。

●会計部

丸山 芙実

例年になく暖かな冬でしたが、三月の声をきくと待たれる春という感じです。会員諸先生にはいかがお過ごしでしょうか。この節は医療に於いての生涯教育で追われ、かつ次々と発売される新薬に頭を痛めております。なおこの四月にはまた薬価引下げ、点数改正と目まぐるしい日々がつづきます。さて過日会計部としての三年のまとめというご依頼を受けまして、あらためてこの三年の会計部の有り方を思い起こしております。部員は、福永、石川、稲生、橋川理事と五名

にて編成いたしております。年一回は何らかの特別議題によっては気分を変える意味で遠出いたしましたりして和やかなチームワークで会合をいたして来ました。会計部の業務と致しましては毎月の収支会計が会計連絡メモ付にて送つてまいります。これは理事会席上にての報告となります。そしてその集計がご存じのように総会において年度末収支決算の報告となっております。今までのところ有難いことに赤字支出もなく、順当にいたっております。

●渉外部

平瀬 文子

国際婦人年日本大会の決議を実現するための連絡会に日本女医学会代表として、以下の会議に参加した。
1 西暦二〇〇〇年に向けての国内行動計画
男女平等をめぐり意識変革・制度上だけでなく、実際上の婦人の地位向上を図る。
① 固定的性別役割分担意識の是正
② 学校教育の充実と社会教育の推進
③ 母性の重要性についての認識の浸透と母性保護
④ 平等を基礎とした男女の共同参加
あらゆる分野において婦

人の参加を促進する。
④ 政策・方針決定への参加の促進
⑤ 雇用の分野における男女の均等
⑥ 農山漁村婦人対策の推進
⑦ 地域社会および家庭生活における男女共同参加の促進
⑧ 多様な選択を可能にする条件整備
⑨ 生涯にわたる学習機会の整備、職業能力開発体系の樹立
⑩ 育児期における条件整備の充実
⑪ 多様な就業形態における就業条件の整備
⑫ 老後生活等をめぐる婦人の福祉の確保

① 所得保障の充実
⑫ 福祉サービスの整備
⑬ 健康づくりの推進と社会参加の促進
⑭ 母子家庭等の自立と安定
2 新国内行動計画の推進について
各省庁に質問する会における討議
① 婦人問題推進機構の強化および政策決定参加について
婦人問題企画推進本部に新たに参加した各省庁に対し、女性の登用および政策決定参加への方針と現状
② 女性と教育問題について
女子差別撤廃条約の実施状況について、および女性と平和・国際協力について
③ 国際緊急援助派遣法について
法の内容及び女性の派遣について
④ 国際協力事業団の活動へ日本から婦人の派遣および相手国の婦人問題への援助
⑤ ODA (政府開発援助) の援助内容、とくに婦人に関わる援助の状況について
3 国連NGO国内婦人委員会結成三十年記念シンポジウム
国連の活動を支え、人権を守り、女性の地位向上を目的とした国連NGO国内婦人委員会は、今年で結成三十年を迎え、その間大勢の女性代表を国連総会に送ってきた。この記念すべき年に当たり、その活動と役割を見直すためのシンポジ

MWIA ニュース 一九八八年二月

●ベネドティ・ベンチュリニ会長
よりの新年のご挨拶

一九八八年が会員の皆さんと会の発展の年となることを祈ります。新しい一九八八年に踏み出したわけですが、過去もそうであったように、一九八七年四月から五月はじめに開催されたソレント会議以降も、わがイタリア女医学会の改善が進みつつあります。

私は皆様が各国女医学会の会員を増やし、国際女医学会へ寄与することを願っております。国際女医学会は世界でも大変ユニークな会です。われわれが政府あるいは非政府団体の活動に貢献することは非常に重要です。そのためには各国の会員は医師として専門職に徹し、これを続け、また、そこで高い活動性を維持すべきです。常に進歩する世界の中で、解決を要する社会的医学的問題は毎日のように出現します。女医としてわれわれはこの困難をさげすみ、解決策をみ

やよりの三氏であった。
以上で昭和六十二年度渉外部の活動報告と致します。

い出すべく努力しなければなりません。それはしばしば複雑な問題です。たとえば遺伝子工学、移植等は研究や治療の新しい方法の中で私どもが関心を持って立ち向かうべきものいくつかの例にすぎません。
一九八九年ソウルにおける第二十二回国際女医学会会議に多くの会員の参加を望みます。
みのり多い年でありませう。

●英国女医学会について
(一九一七—一九八七)

ロンドン大学解剖学教授であり、イギリス外科医ロイヤルカレッジ解剖学教室の主任でもあるR・ボウデン教授が、イギリス女医学会誌(一九八七年十一月号)にイギリス女医学会の歴史について記しています。ボウデン教授と編集者のE・ハンマー博士が、このニューズレターに概要の紹介を許可してくれました。(以下)十九世紀末に、英国の女性は医学

教育を受ける権利を獲得すべく戦い何人かが権利を得ることができた。エリザベス・ブラックウェル、エリザベス・ガレット、ソフィア・アレイク等の名がある。思えば彼女らは女医として登録はされたが、また一定の率でその後も女医の数は増えていったが、彼女らは皆、専門学会の会員として受け入れられなかった。これがきっかけで、一八七九年五月六日に免許を有する女医たちの会がロンドンでもたれた。彼女らは臨床面の諸問題、医の倫理、コンサルタンの教育等々広範囲の問題について発表を行なった。その記録が関連ある団体に送付された。数年のうち女医たちは他の大学においても評価されるようになり、一部の者はロンドンを離れた。英国各地域に登録女医が存在するようになった。
一九一四年に英国女医たちを代表する一団体の結成の必要性が唱えられ、一九一七年に英国女医学会が設立された。ロンドン、スコットランド、アイルランド、英国の北西部、北中部のグループがまとまったのである。初代会長はDr G・ウォルカー——肺結核の専門家としてぬきんでた人であった。彼女は患者の社会復帰のために疾病の職場管理の重要性を唱えた。英国女医学会は設立以来、政治へ関与することなく今日に至ったが、公衆衛生、保健、性病のような特別の医学上の問題、医学教育、男にも女にも影響の大きい医療サービスの場について等の事項を以って英国政

府に貢献してきた。
今日も引き続き英国女医学会は専門知識に関する提言を行ない、医業を一時中断した後に医業に再び戻る女医のためにパートタイムの職場を開発したりしている。政府も重要な医療改革に関しては女医学会に助言を求め、多くの重要な国の委員会に呼ばれている。英国女医学会はまた、国際女医学会創立時委員の一つであり、四回の国際女医学会会議、北ヨーロッパ地域会議を一回それぞれ主催している。四名のわが会員が過去の国際女医学会会議の会長であった。
英国では女医だけの会が必要かどうか、しばしば論議されている。なぜなら今や男女差別廃止法案が成立されているからである。しかし女性はまだまだ諸事決定をするような委員会あるいは、特定の内科、外科専門領域への参加は少ない。英国では女医はなお男子と同等の機会を与えられていないし、女医の優れた素質が適在適所で充分生かされておらず、はいえない。したがって女医学会がなさねばならない仕事が残されている。

●各国女医学会および会員の動向

○イタリア
一九八七年十月十日にボローナにおいて総会開催。臓器移植に関する重要なトピックスが、他の団体からの参加者の注目をあびた。これに関しては、多くの専門家が国中から選ばれた。ボローナ大学からは数名の教

授たちが参加し、会は広範囲の問題点をカバーした。
○オーストラリア
L・L・ロイドグリーン博士が(元国際女医学会会長)一九八七年十月のメルボルン大学医学部の百二十五回創立記念日に祝いのを述べた。この記念日は、また、女性が医学部入学を許可された百年記念でもある。オーストラリア女医学会はこれを十一月に祝った。
○台湾
台湾女医学会は一九八六年四月台北において開催された国際女医学会西太平洋地域会議主催のぬきん出た働きに対し内務大臣から表彰された。女医による予防医学に関するシリーズ講演(十三回)が、台北周辺の恵まれぬ人々を対象に行なわれた。同様なシリーズ講演は一九八六年の終わりにも持たれている。今後二年二回このような企画を進める予定。
○英国
女医学会は一九八七年十一月二十六日に、「女性、健康そして仕事」と題したシンポジウムを開催し、第七十回創立記念日を祝った。女医学会後援者であるH・R・H・グロウスター男爵の出席のもとに、レセプションと晩餐会が、ホワイトホールで開かれた。
○カナダ
カナダ女医学会は、州方針の一つに反対して強く働きかけを行なっている。アルバータ州政府が、避妊相談、IUDの子宮内挿入と滅菌のための

予算計上を拒否したのに抗議している。女医たちがこの制度に反対している理由は、カナダ女性、特に低所得層の女性の健康へ影響することを案じ、また望ましくない妊娠と人工流産の頻度増加が予想されるからである。

○アメリカ合衆国

一つの新しいテーマを導入。すなわち、定年退職に近い女医が、医師としてフルタイムで働くのから、生活を楽しむ方向へと生活を変えるのを助けるための、特別の会合を計画している。会員が定年に向かってどのように処すか助言することが大切と考えている。

■ユニセフと国際女医学会

母子委員会委員長のA・ハスラインが、ネパールにおける子供への予防接種に国際女医学会が協力するためのプログラムを完成した。ユニセフは国際女医学会からの一万USDを受け入れた。これは国際女医学会のユニセフへの初めての協力活動でありWHOへの協力態勢を示すものである。

■WHOのヨーロッパ会議(一九八七年九月ベルギー・ブラスにて)

国際女医学会はデンマークのDr V・ヨルゲンセンを代表として送った。以下彼女からの報告である。

会的主テーマは「二〇〇〇年までに全人類へ健康を」、その他トピック

時間により、その程度や愁訴が変動し、不定である事が特徴である。しかしこの愁訴のなかに重大な器質的疾患が存在する事があるため充分な検査が必要である。このため鑑別診断に長期間を要し、患者は、各科を転々と廻り医療不信に陥っている事が多い。したがって医師と患者との対話が治療に大きく反映する。

女性のライフサイクルのなかで、不定愁訴が発現するものとして、第一に卵巣機能衰微による更年期障害および四十歳未満に閉経が起る早発閉経症がある。第二は炎症や腫瘍、性器官の手術(子宮摘出や卵管結紮)後の卵巣機能欠落症候群、第三に乳房痛・頭痛、浮腫を主訴とする月経前期症候群や、婦人の血の道症とい

われる骨盤内うつ血症候群がある。これらは局所的に体液や血液が貯溜するもので、漢方での瘀血症に相当する。第四に思春期にみられる神経性食欲不振症(アノレキシア・ネルボザ)や妊娠・出産、産褥期にみられるマタニティブルー等の心身症が含まれる。

不定愁訴症候群を主訴別に分類すると、三つのタイプに分類される。第一、自律神経失調型(発汗、のぼせ他)、第二、神経症型(いらいら不安他)、第三、心身症型(心理状態の異常と自律神経失調の共存)で、この分類は治療面に応用され、第一型は自律神経調整剤、第二型は抗不安剤、第三型は両者の混合剤が有効である。婦人の不定愁訴の代表的な

クスとしてエイズ、タバコ、健康活動のために働く人材供給の問題、HFAの件、WHOの基金の減少等が討議された。国際女医学会が注目する点は、ヨーロッパ諸国における医師過剰の問題(結果として医師の失業と利用低下)についてである。今日医師の中の女医の比率上昇があることから、女医たちが今後既設有名病院や研究職への就職の困難に直面することが予測される。(以下略)

(国際連絡書記・藤井傳子)

支部だより

東京都支部連合会
第三回定時総会・研修会
懇親会報告

斎藤 歌子

東京都支部連合会第三回定時総会は、十一月十四日午後三時半より、ホテルニューオータニ、やまぶきの間で開かれました。

会員総数八百二十六名、出席五十八名、記名委任状百九十三名、白紙委任状百二名で、日本女医学会定款第二十七条に準じ、定数六百六十五名に達し、本総会は成立いたしました。

会計監事清水五百子先生の開会の辞に始まり、連合会長今野信子先生のご挨拶、物故会員への黙祷、次に先般在宅投票で行なわれました、会長の明石み代先生の発表、ご説明があり、出席会員一同、これを承認いたしました。新会長に今野信子先生、副会長に三神美和先生、小俣喜久子

先生が当選され、お三方の先生のご挨拶がございました。東京都支部連合会、日本女医学会本部の膝元であり、会員数もとても多いので、会員一同結束して、本部に協力し、会員の相互扶助、融和、親睦につとめ、力強い日本女医学会になるよう頑張りましょうという趣旨のご挨拶がございました。ついで議事、および報告に入り、議長は申し合わせ事項にもつき、会長がつとめられ、議長より議事録署名人に、鶴川美登里先生、渡辺政子先生が指名されました。昭和六十二年一度一般会計収支決算、昭和六十三年年度事業計画案および予算案、その他について審議し、各部より左記の先生方により、報告がなされました。

庶務部 上崎道子
会計部 中山年子
会計監事報告 人見俊子
学術部 青井礼子
事業部 脇田昌子
広報部 岡村正子
渉外部 加藤光子 (敬称略)

質疑に入り、支部の運営、研修会のあり方等について、会員のご熱心な、貴重なご意見、ご質問があり、今野会長も今後前向きに検討するとうご答弁でした。

会計監事、倉島撰子先生の閉会の辞で、総会は無事終了しました。

研修会について

総会に先立ち、午後二時半より東京女子医大小暮美津子教授の司会で、研修会が開かれました。講師には、東京女子医大第二病院産婦人科教授吉田茂子先生をおまねきして、演題は「婦人病と不定愁訴」でございました。

不定愁訴と婦人病

東京女子医大第二病院 産婦人科教授 吉田 茂子

女性のライフサイクルは性ホルモンの影響を受け、多くの変換期がある。このライフサイクルの節目に種々の要因が加わって、婦人病とも呼ばれる不定愁訴が発現する。

不定愁訴とは、全身倦怠、易疲労、頭痛、動悸、不眠、胃腸障害等漠然とした身体的な愁訴を有しているが、検査上これに見合うだけの器質的な

裏づけがない愁訴を不定愁訴と定義し、種々の愁訴を不定愁訴症候群と呼んでいる。その愁訴は全身性(ほてり、盗汗 etc)、神経・筋性(不眠、めまい、しびれ感、腰背痛他)、心血管性(息切れ、胸内苦悶、浮腫他)、胃腸性(食欲不振、胃・腹痛、下痢、便秘他)等その症状は一つだけの事が少なく、多彩で、日により

更年期障害は更年期に起こる不定愁訴症候群であると定義されている。加齢による卵巣ホルモンの分泌減少は閉経、下垂体、卵巣軸の乱れを生じ、これが末梢臓器の代謝性変化を起し、さらに自律神経中枢の機能失調を招き不定愁訴を発生させ、この不調が、環境や社会的因子、心理的因子、婦人の性格構造等と複雑に絡み合って、更年期に多彩な不定愁訴を発現すると考えられている。更年期のホルモン環境をみると、初期には過剰分泌(月経過多、無排卵性月経)や過少分泌(過少月経、月経周期の異常)がみられ、中期に閉経(平均五十歳、近年やや延長)となる。後期に分泌停止(卵巣重量が成熟期の二分の一)する。閉経後分泌停止するまで十数年間微量分泌が続く事もあるといわれている。一方脳下垂体から分泌されるゴナドトロピン(性腺刺激ホルモン)は増量し、血中が高ゴナドトロピン状態となつて、血管運動神経障害症状を呈する。卵巣ホルモン、とくにエストロゲンの分泌減少は、直接種々の閉経後の疾患と関係する。すなわち易感染性(重症化)、血中カルシウム低下による骨粗鬆症の発生、動脈硬化促進(血圧上昇)、免疫能低下による悪性腫瘍発生(子宮癌、卵巣癌、外陰癌)等成人病促進に関与する。

わが群馬県女医学会の会員であられる平敷先生が、WHO専門委員会のアドバイザーに任命され、また九月一日より、埼玉医大放射線科主任教授にられました。このご栄誉に対し、われわれはささやかながらお祝いの気持ちをお話したく、また先生のご明解なお話しも伺いたく、十一月七日、前橋のロイヤルホテルにおいて、講演会および祝賀会を開催いたしました。

平敷先生をかこんで

群馬支部 丸茂 晶子

早く先生にお会いして、ご講義をうかがいたかったと年上の者は思い、先生のおかげで生きてゆく励みになったと、感謝の言葉を述べる若い方たち一人一人の言葉を、丁寧

にお聞きになる先生、本当に先生のお人柄そのままの、さわやかで、温かい会でした。

女性として立派であり、学問も一流であるということは、並大抵のことではありません。大学を出て仕事を始め、やがて結婚問題が出てき、そして家庭を持つ。そこに若い方たちのおおきな悩みが出てきているのを見ると、それを本当に分かりあえるわれわれは、お互いに励ましあいつながら、仕事に理想を失わないようにしてゆきたい、そう願っております。その意味で、この夜集まった会員の皆様、今回の会をよき刺激にしたいだければ、と思っております。

東京都支部連合会よりお知らせ

一、日本女医学会総会の前日、歌舞伎座の観劇券を用意しております。

日時 昭和六十二年五月二十一日(土) 夜の間 午後四時二十分 開演

演目 白浪五人男
枚数 約七十枚

*詳細は後日、御連絡いたします。
二、総会当日、五月二十二日(日)にお茶席を開きます。心安らぐひとときを、おたのしみ下さい。

群馬県女医学会で日本女医学会に入っている方は、四十九名ほどしかありません。以前は八十名に近い会員があったのですが、漸次減少し、現在に至っています。

会費納入を忘れ、自然退会になる方が非常に多いと思いますが、また必要性を感じていない方もあるのではないかと思います。日本女医学会に入っている事で、うける励まし、また刺激は、やはり大きなものがあると思います。会員がそういう気持ち

総会を開催

昨年十一月二十九日午後三時より宇都宮グランドホテルにおいて総会を開催した。総会に引きつづき、午後四時より学術講演会を、午後五時より懇親会

国際女医学会(ソレント)出席記

独協医大耳鼻咽喉科学講師 新井 寧子

三年に一度の国際女医学会は今回第二十二回、ナポリとベスビオ火山をナポリ湾の向岸に望むソレントで開催されました。「帰れソレントへ」の歌で知られるソレントは、南イタリア第一の観光都市。スリ、ひたたり、チフスやコレラは日常茶飯事のナポリも、海の向こうの夜景となると美しいものです。オレンジの実る街路樹を通りぬけ、学会場であるソレントパレスホテルに着くと、そこは大小四つの会議場と同時通訳設備に加えて、広い庭園と屋内・屋外プール

にホテルまである立派な国際会議場でした。世界三十カ国から約四百名の女医が、華やかにお国衣裳で集いました。日本から参加の七十三名は、主催国のイタリアをしのぐ最大勢力、円高の強みを如実に示しました。今回の統一テーマは、「思春期」。思春期をめぐる社会医学的・精神医学的問題をあらゆる角度から九十一の演題でとり上げられました。思春期の最も大きな変化は性(sex)です。思春期の性をとり上げた演題が目立ちました。ティーンエイジの

随胎例の分析では、性の知識が乏しく、寂しいというだけの理由で性交渉に至り産婦人科を訪れる例の多いことが、イタリアや米国から報告されました。他方、デンマーク・スウェーデン・英国からは、学校や地域の相談所による性教育の充実のお陰で随胎例は最近減っている、と報告されました。ティーンエイジはほとんど結婚外の場合が多く、AIDSには大きな関心が寄せられていました。学会第四日目は、WHOの後援を得て、AIDSの診断から追跡調査報告までの、AIDSと「思春期」というワークショップが開かれました。このワークショップの時に、独協医大産婦人科の堀口助教授の発表があり、AIDS報告をできないのが残念です。代りに(失礼!)堀口先生の発表をご紹介します。思春期の月経異常は、精神的なストレスによるものが多く、子宮出血例の母親は神経質で、無月経の少女は子供づく、母親は自己中心的だ、ということでした。反響は大きく、五人もの質問者が立ち、活発な論議がされました。このように、思春期のもう一つの問題点は心身症となつて現われます。私の報告もその一つでしたが、紙面の都合で割愛いたします。参加した女医たちの中ではヤングチームにも出席しました。すでに医師過剰になつて西欧諸国から、女医が育児と医業とを両立させることの

講演会に出席して

日黒支部 松井ひろみ

目黒支部 松井ひろみ

困難さが具体的に訴えられ、手を結ぶことの必要性が叫ばれました。三十二名の女医を擁する獨協も例外ではないでしょう。今日五月十五日に誕生した女医を含めて、ヤングドクターが女であるゆえに挫折することのないよう、何かしたいという念を新たにしました。一方、熟年の女医たちのエネルギーはすさまじいもので、議事進行の歯切れの良さ、次期会長立候補演説の積極性、パーティーでの食欲といい、とてもおばあさん集団とは思われないうものでした。さすがのイタリア男たちも敬遠したのか、だまされたうわさは耳にしませんでした。私たちも、一流(?)レストランで料金をこま化そうとしたところを見つけ、引込めさせるのに成功しました。一週間の会期中、中日の四月二十九日は終日観光。大きな船で、地中海クルーズ、島々をめぐるながら観光と買物で過ごしました。毎晩、パーティーやショウなどが組まれたゆつたり学会で、この機に(学会を口実に)弱い立場の女医たちが国際的に手を結ぼう、というのが当女医学会の真の目的のようでした。

学術研究助成者の研究経過報告

名古屋大学環境医学研究所 神経 感覚 部門 水村 和枝

末梢性痛覚過敏に関する 神経生理学的研究

火傷などの炎症部位は微温湯ですら熱く痛いと感ずる痛覚過敏状態になるが、その痛覚過敏の機序を神経生理学的に明らかにするため本研究を行なった。侵害情報を伝える受容器には、針で刺すような鋭い機械的刺激に特異的に反応する高閾値機械侵害受容器と、機械的、熱的、化学的侵害刺激のいずれにも反応するポリモダル受容器の二種がある。前者は皮膚にしか見いだされておらず、後者は皮膚、骨格筋、内臓に広く分布しており、炎症痛を伝えるに広く考えられている。私どもはその求心繊維の90%以上がポリモダル受容器であり受容野の温度や刺激物質の濃度をコントロールしやすい率丸上精果神経の取り出し標本の実験系を開発し、この系を用いて実験を行なった。受容野を浸すTrebs液の温度を50度C付近まで上昇させた場合、平均四四・三度C(コールド)よりポリモダル受容器に放電増加が見られた。四九度C±一度Cの範囲での平均放電頻度は一・九imp/sec(n=27)であったが、この受容器の最高放電頻度はさらに高い温度域で得られる。二十例において熱刺激を十分間隔で繰り返したところ、十三例で閾値温度の低下(約三度C)と放電頻度の増大よりなる感作が生じ、七例でその逆の脱感作が生じた。これら二群に属するポリモダル受容器の性質を比較して唯一見いだされた違いは、閾値感が感作群(四六・二度C)に比べて脱感作群(四二・一度C)において有意に低いことであった。また感作群では、感作成立後には三・六%の高張食塩水に対する反応が感作前に比べ有意に大きくなつていた。以上よりEvansの系でも感作が生じることが明らかになり、また熱刺激に対する反応と発痛物質に対する

反応をともに増強するものがあることが示唆された。次に炎症部位に遊離され増加して痛みを強めるといわれるセロトニン、プロスタグランジン(PG-E2, I2)の効果を検討した。いずれも炎症部位に見いだされるような低濃度では単独ではポリモダル受容器の興奮を引き起こすことは稀であったが、発痛物質であるブラジキニン、高張食塩水に対する反応を著しく増強した。一方、細径求心神経末端に含まれる神経興奮時に遊離されるといわれているサブスタンスPは、発痛物質に反応をともに増強する効果もほとんどみられなかった。PG合成を抑制するといわれるアスピリンはポリモダル受容器のブラジキニンに対する反応を抑制したが、高張食塩水に対する反応はほとんどかえなかつた。この事実は個体レベルで調べられたアスピリンの鎮痛効果と良く一致する。これらの結果をもとに、今後さらに作用物質の拮抗薬の効果等を調べていきたい。実験はすべて熊澤孝朗教授、佐藤純君と協同行なつたものである。

腎内レニン・アンジオテンシン系に関する免疫組織化学的研究

東京女子医科大学・内科2 成瀬 清子

レニンの存在を組織学的に示すのに従来用いられているのはBowen法であるが、レニンに特異的染色ではない。近年、レニンの抗体が作製され、筆者はこの抗体を用いた免疫組織化学的方法によりレニンを特異的に染色し、腎レニンはいわゆるJG細胞のみでなく、輸出細胞脈や、より中枢側の輸入動脈壁にも存在することを認めた。また、ラットJG細胞内にレニンのみならず、アンジオテンシン(ANG)I、IIが存在することを明らかにし、腎細胞内レニン・ANG系(R-A系)の存在を示唆した。今回、腎内R-A系の生理的、病態生理学的意義解明の一

の役割でもあるわけです。都内では年間十三万人が出生しておりますが、HBe抗原陽性の母親から生まれた児は、ほぼ全員が感染し、八五%、約六百人がキャリア化し、新たな感染源となりますので、その対策が急がれておりました。昭和五十八年七月、都議会本会議で、エイズ問題と、B型肝炎の母子間感染対策の重要性を指摘いたしました。私のこの質問をきっかけに、六十年から、すべての妊婦にHBs抗原検査を実施し、陽性がなされ、その陽性者の新生児にワクチンを投与する事によって、国家的ベースで母子間感染を防止する事になったのです。加えて、本年九月、都の補正予算では、都立医療機関等の医療従事者五百五十人に対し、全額公費によるワクチン接種が決定されました。今後はさらに、民間の医療機関で働く人たちが、ハイリスク者全体に、その方針を広げてゆくべきだと思ひます。未だ治療法もなく、ワクチンの開発もされていないエイズ対策等を含め、地球的規模の考え方に立った予防対策の確立や、新しく発生する多くの課題に対処し、その責任を果たすためにも、日本女医学会の役割は大変大きなものがあると思ひます。私も、会員の一人として、より良い生活環境を創造するために、一層の努力をする決意でございますので、今後ともご指導下さいますようお願い申し上げます。

になれる会であること、入会者がふえるよい方法がないものでしょうか。もちろんわれわれの努力はもつとも大切なものと思ひますが、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

四題の講演のうちから、新井寧子先生の「国際女医学会の報告」の要旨を次に紹介する。

助として、免疫組織化学的方法により腎内レニン・ANGを染色し、比較検討した。

方法

正腎ラット、ANG I変換酵素阻害剤 (Captopril) 投与ラット、testosterone 投与ラットをブアン液にて灌流固定後、腎を摘出。一方、bopsy および剖検で得られたヒト腎組織をブアン固定。パラフィン包埋し、連続切片を作製した。

精製したレニンに対するきわめて特異性の高い抗レニン抗体およびANG II抗体を用いた免疫組織化学的方法により、ラット、ヒト腎内レニン・ANGを連続切片にて染色した。

められた。パーター症候群、擬性パーター症候群ではJG細胞の増殖、肥厚に伴い強いレニンの染色が認められるとともに、さらに中枢の動脈壁、尿管にも染色が認められた。ANG IIの染色は認められなかった。ANG IIの染色は認められなかった。他疾患では、血中レニンと組織レニンの染色性に相関は認められなかった。また、臨床上パーター症候群が疑われ一般組織染色にてJG細胞の肥厚がないとされた例で、JG細胞に強いレニンの染色を認めた。

尿素サイクル異常症の免疫生化学・分子遺伝学的検討

先天性オルニチン・トランスカルバミラーゼ欠損症に注目して

自治医科大学・小児科 児玉 浩子

先天性オルニチン・トランスカルバミラーゼ (OTC) 欠損症は伴性優性遺伝で、女児例は heterozygote である。OTCは核DNAからRNAをへてリボソームでOTC前駆体を作られ、ミトコンドリアに入り成熟OTCとなる。私たちは、先天性OTC欠損症患児の肝OTCの免疫生化学的・分子学的検討を行なった。

対象・方法：(1)先天性OTC欠損症二例(女児)の肝を用いた。(2)牛肝よりOTCを単離し、ウサギで抗

(1)腎内レニン・ANGの染色性は必ずしも平行せず、異なる調節因子の存在が示唆された。(2)腎内レニンとtestosteroneの関連が示された。これは、下垂体レニンがtestosterone依存性なこと、精巢Leydig細胞にレニンが存在することに一致する所見であった。(3)レニンはJG細胞のみならず、他の部位でも産生、または作用することが示唆された。パーター症候群および類似疾患では、尿管に作用する可能性が示された。

フルオログラフィーで、OTC関連物質を検出した。

結果・考察：(1)二例とも肝OTC活性は正常の五〜六%しかなかった。またCRMも正常の五〜六%しかなかった。以上より患児肝CTC蛋白の比活性は、正常であり、残存酵素は、正常OTCと考えられた。(2)無細胞蛋白合成——正常対照では分子量約四万の位置にバンドが一本みられ、これはOTC前駆体と考えられた。症例一では、分子量約四万の位置に非常にうすいバンドが一本みられ、これは正常のOTC前駆体と思

われ、本例では、異常遺伝子からはOTCのmRNAは作られていないと考えられる。症例二では、分子量四万と約三万の位置とにバンドが二本みられた。分子量四万のバンドは正常のOTC前駆体であり、分子量約三万のバンドは異常なOTC前駆体と考えられ、分子量約三万のバンドは、異常遺伝子由来のものと思われる。

理事会議事録

日時 昭和63年1月23日
場所 京王プラザホテル 南館四階 かつら

出席者(敬称略)
山崎、小俣、久保田、佐藤、明石、石原、佐野、白橋、野沢、平瀬、福永、藤井、丸山、三好、八木、石川、稲生、井上、鶴川、川口、小出、小暮、二村、野中、野本、橋川、藤田、添田、西山

欠席者(敬称略)
橋本、石津、大原、関口、南雲、野呂、山本、山口

庶務報告 野沢常任理事
11月22日 理事会および第十回学術講演研修会開催
12月18日 日本女医の実態調査

報告書発送
12月19日 国連NGO国内婦人委員会三十周年式典に山崎会長、佐野常任理事出席
12月23日 WHO西太平洋地域事務局長中嶋宏先生を激励する会に山崎会長出席
S 63年1月9日 第四十二回国連総会報告会に山崎会長、佐野常任理事出席
その他
(1)藤本孝雄厚生大臣および長野祐也厚生政務次官より就任挨拶あり
(2)日本女医の実態調査報告書の礼状多数あり
(3)故石原すみ先生ご遺族より供養の品あり

国際女医会 第二回西太平洋地域会議(案内2)

会期 昭和63年11月25日(金)〜26日(土)
開催地 マニラ(マニラホテル)
主催 フィリピン女医会「プログラム」

●11月25日
登録 8時
開会式 9〜10時半
・発展と平和への予防医学のセッションが始まる。
・プライマリー・ヘルスケアにつき西太平洋地域各国からの報告

●11月26日
一、決議事項提案 8時
二、事務会議
座長/Dr.V・クアン(国際女医会副会長西太平洋地域)

昼食 12時30分
ワークショップ 13時30分
「発展と平和への予防医学の対策」
夕食 19時(マニラホテル)

会計報告 丸山常任理事
十一月、十二月分、別紙どおり報告 承認

各部報告 藤田理事
(広報部) (1)会誌百十二号を月末に発送予定
(事業部) (1)女医の実態調査報告書の残部あり
(学術部) (1)第二回ワークショップの演者三名決定

(4)藤田親代先生より難民を助ける会へ寄付あり(六五七円) 追加事項
(1)12月19日 国連NGO国内婦人委員会へ野本理事出席
(2)第三十三回定時総会のお知らせと告示について昭和六十三年一月発行の日本女医会誌に掲載する旨、事後承諾する 承認

(4)常任理事廃止の意見については現状どおりでよいとする
(5)監事数は、現三名とする
(6)会長の任期については、今後検討
(7)役員任期については、今後検討
(8)副会長は、二期とし半数交代については、削除する
(9)役員定年制については、今後検討
(10)理事、評議員の兼任は、できな

費用
総会登録費 三、〇〇〇円
懇親会費 一五、〇〇〇円
参加者への記念品 庶務部へ願う
選挙方法 コンピューターの導入をする
観劇会およびアトラクション 東京都支部連合会に願う予定
三、その他
(1)会議室使用および備品機械使用賃借について
・会議室使用料は、一回三、〇〇〇円、年額三〇、〇〇〇円
・コピー通過料は、一枚につき一〇円とする
(2)国際女医会について
・コンピュータ機購入費として三、〇〇〇マルク国際交流基金会計より送金する
・各国から会長および副会長候補の推薦依頼あり
・国際女医会規約改正案が本部より届く
(3)日本女医会優功賞について
・優功賞の適格者の推薦を願う
・審査において審査を願う

報告事項
(1)下記のとおり各賞の推薦および応募者があり今後それぞれの審査会において審査を願う
①吉岡弥生賞の被推薦者 平数淳子(埼玉支部)
長池博子(宮城支部)
②荻野吟子賞 推薦者なし
③学術研究助成の応募者

議事
一、定款について
定款および施行規則の改正案事項について書面で提出していただいた意見をもとに別紙資料にしたがい検討
(1)第6条へ第7条(1)名譽会員を入れる
名譽会員への選挙権については今後検討
(2)第7条 名譽会長の項は、特に加えない
(3)第14条 理事数について今後検討

二、総会について
日時 昭和63年5月22日(日)
場所 東京 京王プラザホテル
日程 評議員会 午前10時
(昼食 午前11時30分)
選挙 午後1時
総会 午後1時30分
選挙結果発表
会長、副会長、常任理事の選任および承認
懇親会 午後5時

費用
総会登録費 三、〇〇〇円
懇親会費 一五、〇〇〇円
参加者への記念品 庶務部へ願う
選挙方法 コンピューターの導入をする
観劇会およびアトラクション 東京都支部連合会に願う予定
三、その他
(1)会議室使用および備品機械使用賃借について
・会議室使用料は、一回三、〇〇〇円、年額三〇、〇〇〇円
・コピー通過料は、一枚につき一〇円とする
(2)国際女医会について
・コンピュータ機購入費として三、〇〇〇マルク国際交流基金会計より送金する
・各国から会長および副会長候補の推薦依頼あり
・国際女医会規約改正案が本部より届く
(3)日本女医会優功賞について
・優功賞の適格者の推薦を願う
・審査において審査を願う

報告事項
(1)下記のとおり各賞の推薦および応募者があり今後それぞれの審査会において審査を願う
①吉岡弥生賞の被推薦者 平数淳子(埼玉支部)
長池博子(宮城支部)
②荻野吟子賞 推薦者なし
③学術研究助成の応募者

演題提出先 〒173 板橋区加賀2-11-1
帝京大学医学部薬理学教室・藤井 儔子

常任理事会議事録

阿部真知子(愛媛支部) 西川雅子(京都支部) 宮坂京子(世田谷支部) 水村和枝(愛知支部) 泉二登志子(東女医学内支部) (2)各大学より推薦のあったWHO 専門職員候補者の提出をする (3)「高齢者の自立と生きがいを求めて十年」という会より「にぎっ太くん」の紹介あり (一個二、〇〇〇円) (4)昭和六十三年一月十七日付、朝日新聞掲載「文様」の紹介あり 各部より次回常任理事会に予算額の提出をすること

以上 副会長(庶務担当) 久保田 庶務部 野沢、明石、三好

日時 昭和63年2月27日 場所 日本女医会 会議室 出席者(敬称略) 山崎、小侯、久保田、佐藤、明石、石原、佐野、白橋、野沢、平瀬、福永、藤井、三好、八木 欠席者(敬称略) 橋本、丸山

庶務報告 明石常任理事 1月23日 定款委員会および理事会開催

1月30日 日本女医会誌百十三号、会費請求書発送

2月7日 学術研究助成選考委員

員会開催 その他 (1)会議室使用料および備品機械使用料について東京都支部連合会へ通知 (2)中嶋宏先生を激励する会よりWHO事務局長当選の礼状あり (3)故小林いつき先生、故牧野操先生、故石井寿先生各ご遺族より香典の礼状あり

連絡事項

一、労働省東京婦人少年室より第四十回婦人週間記念東京婦人問題会議開催について通知あり 日時 昭和63年3月25日(金) 場所 後楽園会館 大会議室

各部報告

(事業部) 石原常任理事 二月六日事業部会開催 (公衆衛生費より中毒110番としてステッカー作成等について検討)

(学術部)

藤井常任理事 二月七日学術研究助成選考委員会を開催し三名の授与者を内定(国際女医会) 藤井国際連絡書記 国際女医会西太平洋地域カンファレンス会議について 日時 昭和63年11月25-26日 場所 フイリピン マニラ 旅行日程を日本交通公社へ依頼する

職事

国際女医会会長および副会長候補者は日本から推薦者なし

一、昭和六十三年度各部事業計画案および予算案について 各部より事業計画案および予算額について提出あり 学術部 二、〇〇〇、〇〇〇 広報部 三、〇〇〇、〇〇〇 事業部 一、五〇〇、〇〇〇 渉外部 六〇〇、〇〇〇 庶務部 二二、六一一、〇〇〇 二、その他 (1)定款および定款施行規則について別紙アンケート集計にもとづき報告あり (2)毎日新聞報道出版(株)より当会名簿購入希望に対し三〇、〇〇〇円にて頒布する (3)総会に関して ①記念品について 高齢者の自立と生きがいを求めて十年の会より販売している「にぎっ太くん」を記念品とする、他にもう一つ何かを考える ②総会前日の観劇会等については、特に予定しない (4)日本女医会優功賞について 今後候補者を考える (松岡宏子先生、佐藤イクヨ先生、大橋リュウ先生、佐野アヤ子先生) (5)吉岡弥生賞の審査結果授与者二名の決定発表あり 医学に貢献した会員 平敷淳子(埼玉支部) 社会に貢献した会員 長池博子(宮城支部)

会員動静

副会長(庶務担当) 久保田 庶務部 明石、野沢、三好 入会会員(敬称略) 渋谷支部 橋本しをり 新宿支部 竹内 恵 文京支部 森口聡子 神奈川支部 角野禎子

集記



今回は来る五月の役員改選を迎え、各理事任期の最後の会誌となりました。 小侯副会長の巻頭言を始め、各部理事の記事をご覧いただき、山崎会長を先頭に努力してきた三年間の実りを充分ご理解いただけただこと存じます。 前回百十三号においては、南谷幹夫先生のワクチンに関するご講演内容を掲載し、たいへんな反響を呼び、皆様からお喜びの声を寄せいただきました。 本号では東京都支部連合会総会において開かれまして吉田茂子先生のご講演要旨や、めざましい各支部のご活躍の模様等、活気溢れる記事をご寄稿いただきました。 世界を騒がすイライラ戦争、日本

新卒入会会員(敬称略) 栃木支部 菅原由美 東女医学内支部 神戸雅子 兵庫支部 呉 雅美 物故者会員(敬称略) 千葉支部 石井 寿 渋谷支部 小林いつき 杉村津留子 神奈川支部 石原すみ 山口支部 牧野 操

列島の異常天候、関東地区を脅かす地震など、激しく揺れ動く世相を背景に、日本女医会は今、定款委員会を設置し定款改正に取組み、ひたすら成長の一端を辿りつつあります。 会員の縦と横の親睦を計り、対外的には日本女医会の紹介誌としての目的を果たすべく、広報部一同一丸となって努力してまいりましたが、一方、ご多忙の中を多数の会員のご協力をいただき、今日を迎えることができましたことを改めて厚く御礼申し上げます。(八木)

昭和63年4月20日 印刷 昭和63年4月25日 発行 編集人 日本女医会 発行所 東京都渋谷区渋谷2-1-817 青山宮野ビル 社団法人 日本女医会 TEL(498)〇五七-5116(815)六六六一 株式会社 金剛出版